

## 『死に至る病』における 「絶望の弁証法」についての考察

鈴木祐丞

### 序

キエルケゴールは『死に至る病』の序言のなかで「絶望はかくも弁証法的である *Saaledes dialektisk er nemlig Fortvivlelse*」(SKS 11, 118: 桟田訳 p. 17)と述べている（なお、以下ではこの引用箇所で意味されている絶望の弁証法的性質を「絶望の弁証法<sup>①</sup>」と呼称することにする）。また、キエルケゴールは、同書の序言で、「絶望の弁証法」を示唆して、絶望が「病 *Sygdommen*」としての側面とともに「薬 *Helbredelsesmidlet*」としての側面も併せ持っているという事態に言及している (SKS 11, 118: 桟田訳 p. 17 参照)。それでは、絶望が「病」であるとともに「薬」でもあるというこの事態すなわち「絶望の弁証法」とはいったい何を意味するのだろうか。このことを理解することは、「絶望」を全編の主題とする『死に至る病』の正確な理解のために、とくにキエルケゴールの『死に至る病』執筆の真意を把握するために、不可欠であろう。しかしながら、キエルケゴールは『死に至る病』の序言において「絶望の弁証法」を示唆して上述のような事態に言及しはするものの、その事態についてのさらに踏み込んだ解説は同書のいざこにおいても行われておらず、「絶望の弁証法」が何を意味するかについての理解は研究者の解釈に委ねられているのが実状であると言える。そこで、本稿では、絶望が「病」であるとともに「薬」でもあるという事態すなわち「絶望の弁証法」とはいつ

<sup>①</sup> キエルケゴールの「弁証法」の用法は多様である (ディーム 1969 p. 9; Theunissen 2005 p. 106 参照) が、「多くの場合、相反すること、あるいは、互いに矛盾することが、一つのものについて同時に言われるときに用いられる」(栈田啓三郎訳・注 1996 p. 255)。

たい何を意味するのか、解明することを試みる。

以下では、まず、「死に至る病」において「絶望」とは何を意味するかを考察することにする。それを踏まえて、「絶望の弁証法」の解明へと進むことにしたい。

## 1 「絶望」とは何か

「絶望の弁証法」の解明のために必要な予備的作業として、「死に至る病」において「絶望」とは何を意味するかについてここで考察をしておく。

### 1-1 「絶望」理解の前提としてのキエルケゴールの自己論

さて、「死に至る病」の主題である「絶望」は、同書において論述されるキエルケゴールの自己論にもとづいて規定される概念である。そこで、「絶望」とは何かを考察するに先立って、「死に至る病」におけるキエルケゴールの自己論を概観しておくこととする。キエルケゴールは、「哲学的断片」において詳述されるようなキリスト教的世界観を背景としながら、人間それ自身はいかなるあり方をしているのかを、「死に至る病」第1編冒頭の自己論（SKS 11, 129-130: 榎田訳 pp. 27-28 参照）のうちに描き出している。以下に、その自己論の本稿における解釈を記す。

まず、その自己論は、下記の三つの階層的な命題から構成されているものと考えることができる。

- (1) 人間は、時間的なものと永遠なものという二つのもののあいだの関係（総合）である。
- (2) そうした二項のあいだの関係（総合）がそれ自身に関係（態度決定）することとしてあるときに、はじめて人間は自己と言いうる。
- (3) こうした関係（総合）にたいして関係（態度決定）することとしての自己は、神により指定された。

そのうえで、これら三つの命題はそれぞれ以下のように解釈することができる。

(1) まず、人間は、「時間的なもの」と「永遠なもの」という二項により構成された存在として捉えることができる。これらのうち、まず、人間における「時間的なもの」（「人間的なもの *det Menneskelige*」（*Pap. VIII<sup>2</sup> B 168<sup>6</sup>*）<sup>\*2</sup>、「地上的なものの *det Jordiske*」（*SKS 11, 165*: 榎田訳 p. 97）とも呼ばれる）とは、人間がこの世での生を終えるときに失われるもののことと考えればよいであろう。具体的には心と身体の双方が含まれるものと考えておくことにする。つぎに、人間における「永遠なもの」（「神的なもの *det Guddommelige*」（*Pap. VIII<sup>2</sup> B 168<sup>6</sup>*）とも呼ばれる）とは、人間がこの世での生を終えるときにも存在し続ける何かのことと考えればよいであろう。それは、人間のうちなる、永遠の命に与る部分のことであろう<sup>\*3</sup>。人間とはこうした二項からなる関係（総合）としての存在なのである<sup>\*4</sup>。

(2) つぎに、たしかに人間は上述のように永遠なものと時間的なものという二項から構成された関係（総合）として存在するのだが、それにとどまるものではない。すなわち、関係（総合）としての人間自身がその関係（総合）をいかにあらしめるか能動的に関係（態度決定<sup>\*5</sup>）せねばならず、そして人間はそのように自らにたいして関係（態度決定）することとしてあるときにはじめてその本来的なあり方としてすなわち「自己」として生きていると言いうるのである。具体的に考えてみたい。関係（総合）としての人間を構成する一方の項たる時間的なもの（心と身体）は、この世における人間の死によってすべてが終結する時間的な世界に属し、時間的なさまざまな事物

<sup>\*2</sup> 本稿において引用される “*Pap. VIII<sup>2</sup>*” の記述はいずれも『死に至る病』の草稿に該当する。

<sup>\*3</sup> この解釈はマランチュクに拠る。すなわち、マランチュクは「永遠のもの」を「靈」と捉える（マランチュク 1976, pp. 22-23 参照）。

<sup>\*4</sup> 心と身体が『死に至る病』の自己論における人間を構成する二つの側面（すなわち、無限性・永遠のもの・自由と、有限性・時間的なもの・必然）とどのように対応するかについては、キエルケゴールは明確なことを述べていない。本稿では、マランチュクの考えに従い、「時間的なもの」に心と身体の双方を配した（マランチュク 1984 p. 368 参照）。

<sup>\*5</sup> 「関係」と訳されるデンマーク語 “*Forhold*” は、「関係」（ドイツ語の “*Verhältnis*”）という意とともに「態度」（ドイツ語の “*Verhalten*”）という意も併せ持っている（榎田啓三郎訳・注 1996, pp. 266-67 参照）。

(富・名譽・近しい人びとなど)に価値を置く。他方で、関係(総合)としての人間を構成するもう一方の項たる永遠なもの(永遠の命に与る部分)は、この世における人間の死によっては終結することのない永遠の生に属し、永遠の淨福への回帰に価値を置く。そして、「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」(「マタイによる福音書」6:24)。すなわち、時間的なさまざまなもの(富・名譽・近しい人びとなど)に重きを置こうとする時間的なもの(心と身体)のもつ価値観と、永遠の淨福への回帰に重きを置こうとする永遠なもの(永遠の生に与る部分)のもつ価値観は、両立し得えず矛盾しあうのである。そして、関係(総合)としての人間を構成する二項のもつこうした矛盾しあう価値観をまえに、関係(総合)としての人間自身が、どちらの価値観に重きを置いて生きるのかをたえず態度決定して生きねばならないのである。そして、そこでどのような態度決定をじっさいにするにせよ、そのように意識的に態度決定して生きる人間こそがその本来的なあり方としてすなわち自己として生きていると言えるのである。なお、キエルケゴールはこのような人間に本来的な生のことを「精神 Aand」とも呼んでいる(SKS 11, 129; 榎田訳 p. 27 参照)。

(3)) そして、人間は、神によって、そのような関係(総合)自身に関係(態度決定)することすなわち自己として、措定されたのである。このことは、換言すれば、まず、人間は喪失した永遠の淨福へと回帰するか否かを神により問われている存在であるということを意味するものと考えられる。さらには、時間的なものと永遠なものという二項の関係(総合)たる人間がその関係(総合)自身をいかにあらしめるべく関係(態度決定)するかのうちに、そうした神による問い合わせにたいする人間的回答が本来的に現れるということを、意味するものと考えられるのである。

以上が『死に至る病』のキエルケゴールの自己論についての本稿の解釈である。

### 1-2 「絶望」とは何か

さて、上述の自己論にもとづいて、キエルケゴールは『死に至る病』において「絶望」をつぎのように規定している。

まず、「絶望」とは、人間を構成する時間的なものと永遠なものという二項のあいだの「不均衡〔齟齬〕 Misforhold」のことである（SKS 11, 131-132: 桦田訳 pp. 32-33 参照）。換言すれば、「絶望」とは、時間的なもの（心と身体）と永遠なもの（永遠の生に与る部分）との上述の矛盾的関係（総合）に直面して、神意にもとづかずに我意にもとづいてその関係（総合）に關係（態度決定）することである。そして、こうした不均衡は、典型的に、人間を構成するそれら二項のうち、時間的なものにだけ価値を置くことにより永遠なものを失くそうとするという仕方で、現れる。したがってキエルケゴールは次のように言う。

絶望するとは永遠なものを失うことである。（SKS 11, 167: 桧田訳 p. 99）

また、「絶望」とは、自己たること（時間的なものと永遠なものの関係（総合）に關係（態度決定）すること）を拒絶することでもある。すなわち、時間的なものと永遠なものという二項の矛盾的関係（総合）に直面しながら、その関係（総合）へと關係（態度決定）することから逃れようとしている。この点にかんしては、たとえば次のように言われている。

絶望とは自己を食い尽くすことにはかならない。（SKS 11, 134: 桧田訳 p. 37）

なお、「絶望」が、永遠なものを失くそうとすることであり、また自己たることから逃れようとしてすることとは、次の引用箇所からもうかがい知られる。

もし人間が病気によって死ぬように絶望によって死ぬのであれば、彼の内なる永遠なもの det Evige i ham、自己 Selvet は、肉体がその病気で死ぬのと

同じような意味で死ぬことができねばならないだろう。しかしこれは不可能である。(SKS 11, 134: 桟田訳 p. 37)\*6

最後に、「絶望」とは、また、自己を指定した神から逃れようとしている。このことは同書のつぎのような箇所からうかがい知ることができる。

彼〔絶望者〕は、彼の自己 Selv を指定した力〔神〕から彼の自己を引き離そうと欲している。(SKS 11, 136: 桟田訳 p. 41)

自己を指定した神から逃れようとしていることとは、換言すれば、上述のような永遠の淨福への回帰の如何を問う神とそれを問わわれている人間という世界観・人間観の全体を拒絶することと考えることができよう。

以上をまとめると、「絶望」とは、人間を構成する一方の項たる永遠なもの不失くそうとすること、あるいは本来的な人間のあり方たる自己を失くそうとすることである。また「絶望」とは、このような自己を指定した神との関係から逃れようとしていることである。これらをさらにまとめれば、「絶望」とは、人間が、永遠の淨福への回帰についての神による問い合わせに対し、さまざまな仕方で否定的な回答を与える事態のことである。

なお、「絶望」についての本稿のこのような理解は、マランチュク\*7によるそれについての理解と、ほぼ軌を一にしている。すなわち、マランチュクは絶望を「内的な現実性及び超越的な現実性としての永遠なものからの人間の逃走」(マランチュク 1984 p. 371-372) と理解しているのである。

## 2 「絶望の弁証法」についての考察

ここまで、「絶望の弁証法」の解説のために必要な予備的作業として、「絶望」とは何を意味するかについての考察を行ってきた。

\*6 これらの引用箇所のうちに存する逆説的事態、すなわち「絶望」とは自己を食い尽くすことでありながらそれがじつは不可能であるという事態は、本稿における「絶望の弁証法」の解明において重要な役割を果たすこととなる(本稿 2-2-2 参照)。

\*7 本稿では、Malantschuk, G の日本語音写を「マランチュク」に統一した。

さて、既述のとおり、キエルケゴールは、『死に至る病』の序言においてこうした絶望の含み持つ矛盾的性質すなわち「絶望の弁証法」に示唆的に言及し、こうした絶望が「病」としての側面とともに「薬」としての側面も併せ持っている旨を述べているのである (SKS 11, 118: 榎田訳 p. 17 参照)。

ところで、『死に至る病』の草稿においては、この「絶望の弁証法」について、つぎのようにいくらか踏み込んだ説明がされていた。

すなわち絶望はかくも弁証法的である。絶望は死に至る病である、それでいて、別の面からすればこの病からの治癒 Helbredelsen の最初の形式なのである。(Pap. VIII<sup>2</sup> B 170<sup>1+8</sup>)

すなわち、絶望が「病」であると同時に「薬」でもあるという「絶望の弁証法」とは、より詳しくは、絶望が「死に至る病」であると同時に「この病からの治癒の最初の形式」であるという事態を指すのである。

そこで、「絶望の弁証法」について、つぎのように問うことにする。すなわち、絶望が「死に至る病」であると同時に「この病からの治癒の最初の形式」であるという事態は、いったい何を意味するのであろうか。

以下では、絶望が「死に至る病」であるとはいかなることか、絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であるとはいかなることか、順に考察してゆく。

\*8 草稿のこの箇所は、「絶望の弁証法」に言及する『死に至る病』の序言の箇所 (SKS 11, 118: 榎田訳 p. 17) に対して、つぎのような位置づけにある。すなわち、「絶望の弁証法」に言及する『死に至る病』の序言の箇所は、草稿においては、異なる場所に (すなわち第 1 編 A の表題への注として)、また内容を多少異にして、存在していた。そして、草稿におけるその叙述が清書の段階で序言へと移される際に省かれたのが、訳出した「絶望は死に至る病である、それでいて、別の面からすればこの病からの治癒の最初の形式なのである」という箇所である。なお、大谷長は、草稿から清書へのこの変更によって、『死に至る病』の序言とそれ以下の内容のあいだに不整合が生じることになったと、解釈している (大谷長 1977a pp. 28-37 参照)。

## 2-1 絶望が「死に至る病」であることについての考察

それでは、絶望が「死に至る病」であるとは、いったい何を意味するのであろうか。

ここで、「死に至る病」におけるつぎの叙述に着目したい。

死に至る病についてもっとも厳密な意味で語られるべきならば、それは、最後のものが死であり死が最後のものであるような場合の病でなければならない。(SKS 11, 133: 桟田訳 p. 36)

では、「死に至る病」すなわち「最後のものが死であり死が最後のものであるような場合の病」とは何か。

まず、キエルケゴールのキリスト教的世界觀からして当然のことではあるが現世的な生や死は「永遠の命のうちでの小さな出来事にすぎない」(SKS 11, 124: 桟田訳 p. 20) のであり、したがって現世的な生における病気や苦難といったものはそれらの「最後のものが死〔すなわち現世的な死〕」ではあろうが「死が最後のもの」ではない。だから、「死に至る病」とは現世的な生における病気や苦難ではない(SKS 11, 124: 桟田訳 p. 21 参照)。

そこで、「死に至る病」すなわち「最後のものが死であり死が最後のものであるような場合の病」とは、永遠の命にかかる生における病と言えよう。永遠の命にかかる生とは、上述のとおり、神により永遠の淨福への回帰の如何を問われている人間の全体的生、すなわち精神(あるいは自己)<sup>9</sup>としての生のことである。したがって、「死に至る病」とは、精神における病とも言えよう。

まとめると、絶望が「死に至る病」であるとは、絶望が、永遠の命にかか

<sup>9</sup> キエルケゴールによれば、「精神」とは、「人間の理解が彼の生に行使する力」(Pap. X<sup>3</sup> A 736)のことである。「死に至る病」に即して考えれば、「精神」とは、自らがいかなる存在であるかについての(すなわち自己についての)人間の理解が彼の生に行使する力のことであり、つまりは永遠の淨福へと回帰せんがために矛盾的二項からなる関係(総合)にたいしてじっさいに関係(態度決定)しようとする力のことである。

わる生における病であり精神における病である、ということだったのである。より詳しく言えば、絶望が「死に至る病」であるとは、人間が永遠の淨福への回帰についての神による問いかけに対し永遠なもの・自己・神を失くそうとするという仕方で否定的な回答を与えることが、人間の本来的な生たる永遠の命にかかわる生（精神）における治癒を要するような状態である、ということである。

## 2-2 絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であることについての考察

それでは、「絶望の弁証法」を構成するもう一方の側面、すなわち絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であるとは、いったい何を意味するのであろうか。なお、以下では、絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であるのはなぜかという随伴する問題についても考察を行いたい。

### 2-2-1 絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であるとは何を意味するか

はじめに、絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であるとは何を意味するかについて考えたい。

まず、「この病」とは「死に至る病」のことであることは、上掲の引用箇所 (*Pap. VIII<sup>2</sup> B 170<sup>1</sup>*) を思い起こせば、容易に理解されるであろう。

そして、「治癒 Helbredelsen」については、キエルケゴールがその語によつて少なくともつぎの二つのことを意味していることが、「死に至る病」の草稿からうかがい知られる。まず、「治癒」とはキリストによる救いにあずかることである。このことは、「われらの主、イエス・キリストよ、あなたはこの死に至る病に苦しむ者たちを治癒する helbrede ためにこの世にいらした」 (*Pap. VIII<sup>2</sup> B 143<sup>\*10</sup>*) という箇所から読み取ることができる。また、「治癒」とは絶望者が絶望を（「受苦 Liden」ではなく）「責め Skyld」として理解するようになることである (*Pap. VIII<sup>2</sup> B 168<sup>6</sup><sup>\*11</sup>* 参照)。

\*<sup>10</sup> *Pap. VIII<sup>2</sup> B 143* は、「序言」のあとに来るべきものとして書かれながらも消書の段階で省かれた「祈り」と題された文章である。

\*<sup>11</sup> *Pap. VIII<sup>2</sup> B 168<sup>6</sup>* は、草稿における第 1 編 A, b) 「絶望とはめまいあるいはめまいのよ

そこで、絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であるとは、上述の絶望が、死に至る病を脱してキリストによる救いに与ったあり方であり、みずからの絶望の状態を「責め」として学ぶようになった状態へといたる最初の形式である、という事態を意味するのである。大雑把に言えば、永遠性から逃れて生きること（絶望）が、地獄落ちへつながりうる生き方（死に至る病）を脱して永遠の淨福へ回帰しうる生き方（治癒）へといたる第一歩である、ということである。

#### 2-2-2 絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であるのはなぜか

「絶望の弁証法」についての解説をここまで推し進めたとき、避けがたい疑問が生じることとなる。すなわち、いったいなぜ絶望それ自身が死に至る病からの治癒の最初の形式でありうるのだろうか。

ところで、ウォルシュはこのような問題と同心的な問題について考察し (Walsh 2005, pp. 29-32 参照)、つぎのような見解を述べている。「『死に至る病』は絶望からの抜け道をただ間接的に暗示するばかりである」(同 p. 31)。つまり、ウォルシュによれば、絶望の治癒がいかにして可能であるかについて、「死に至る病」のうちに直接的な言述は見当たらないのである。同様の問題と見解はメールポールと大谷長によっても提示されている (メールポール 1980 p. 219; 大谷長 1977a p. 31 参照)。そして、このようなウォルシュらの見解はキエルケゴール自身の言葉と符合しているのである。すなわち、キエルケゴールは「死に至る病」の序言において「絶望の弁証法」について言及する際に「この書全体において絶望は薬としてではなく病として理解されている」(SKS 11, 118: 桦田訳 p. 17) と述べているのである。ようするに、なぜ絶望それ自身が死に至る病からの治癒の最初の形式でありうるのかという本稿の問題について、「死に至る病」のうちに直接的に解答を見出すことはできないのである。

---

うなものである、しかし本質的に異なったものとして」の第三段落である。なお、この草稿における第1編 A, b) は清書の段階で省かれた。

しかしながら、この問題についてのキエルケゴールの考えのひとつ<sup>\*12</sup>は、『死に至る病』とその草稿のいくつかの箇所を考え合わせることにより、間接的な仕方で、推察することが可能と思われる。以下ではそのことを試みる。具体的には、『死に至る病』に描出されているとされる「理念性の諸要求」(Pap. X<sup>5</sup> B 16) にかんする同書および草稿中のいくつかの箇所の考察をつうじて、その問題についてのキエルケゴールの考え方を探ることを試みる。

#### 2-2-2-1 「理念性の諸要求」とは何か

キエルケゴールは『死に至る病』の草稿 (Pap. X<sup>5</sup> B 16-23 \*<sup>13</sup>) のなかで、同書には「キリスト者であることにかんする理念性の諸要求 Idealitetens Fordringer」(Pap. X<sup>5</sup> B 16) が述べられている旨を繰り返し述べている。

まず、『死に至る病』と協働して人びとをキリスト者となるように導くとされる (Pap. VIII<sup>1</sup> A 558 参照) 著作である『キリスト教への修練』を参考にすれば、「理念性の諸要求」とは、キリスト者であるための最高度にまで高められた諸要求のことを意味するものと理解される (SKS 12, 15 参照)。

それでは、『死に至る病』に描出された「理念性の諸要求」(キリスト者であるための最高度にまで高められた諸要求) とは何を指すのであろうか。ここでふたたび上に言及した草稿 (Pap. X<sup>5</sup> B 16-23) に着目したい。その草稿を辿ってゆくと、まず、キエルケゴール自身がそうした「理念性の諸要求」を満たしておらずその諸要求がキエルケゴール自身にも向けられている旨が記されている (Pap. X<sup>5</sup> B 17, 18 参照) ことに気づく。そして、「理念的なもの Idealet を贊美しながら自分では尽力 stræbe しないというのは、神を冒涜することであろう」(Pap. X<sup>5</sup> B 18) と述べられていることから、キエルケ

\*<sup>12</sup> 本稿 p. 11 注 1 参照。

\*<sup>13</sup> Pap. X<sup>5</sup> B 16-23 は、『死に至る病』の巻末に付されるべきものとして書かれた編集者の注の草稿である。それらは消去においては用いられなかった。なお、その「編集者」とはキエルケゴール自身のことを指す。これは、キエルケゴールが、自身の名を『死に至る病』の著者として用いることを避け、かわりに「アンティ-クリマクス」という偽名を著者に当てたことによる。

ゴール自身がそうした諸要求に応じるように尽力していることがうかがい知られる。そのうえで、キエルケゴールは、自身が『死に至る病』の描出する「病人」であろうと尽力していると記している (*Pap. X<sup>5</sup> B 22* 参照)。そこで、「理念性の諸要求」に応じるべく努力することとは、具体的には『死に至る病』の言う「病人」であるべく努力することを意味するものと推察されるのである。そして、『死に至る病』の言う「病人」とは、「死に至る病」を病んでいる者すなわち絶望者 (*SKS 11, 133*: 桦田訳 p.36 参照)のことである。これらのこと踏まえると、『死に至る病』に描かれた「理念性の諸要求」とは、同書が描き出すさまざまな絶望者であれという要求のことと考えられる。具体的には、『死に至る病』第1編 C, B. および第2編 Bにおいて描かれているさまざまな絶望の形態<sup>14</sup>が「理念性の諸要求」であると言えよう。

「理念性の諸要求」にかんする本稿のこうした見解を裏づけ、さらに補正する言述が『死に至る病』のうちに見出される。

絶望そのものがひとつの否定性であり、絶望についての無知は新たなひとつの否定性である。ところで、真理に至るためにには、ひとはすべての否定性を通過しなければならない。(*SKS 11, 159*: 桧田訳 p. 85)

すなわち、この引用箇所から、まず、『死に至る病』における「理念性の諸要求」とは絶望の諸形態であるという上述の見解の妥当性が確認されるものと思われる。さらに、この箇所からは、「理念性の諸要求」とは絶望の諸形態の「すべてをしつくせ」という要求であることがうかがい知られるのである。

以上をまとめると、『死に至る病』における「理念性の諸要求」(リスト者であるための最高度にまで高められた諸要求)とは、具体的には、同書の描き出す絶望の諸形態のすべてをしつくせという要求のことであると言え

<sup>14</sup> すなわち、本稿では、『死に至る病』第1編 C, B. から第2編 B にかけて絶望の深化の過程が連続的に描き出されているものと解釈する。なお、「絶望」は第2編においては質的に変容を遂げた「罪」として描き出されることになる (*SKS 11, 191*: 桧田訳 p. 141 参照) が、本稿ではそのような「罪」をも包含する概念として「絶望」を用いることとする。

る。つまり、キエルケゴールは、『死に至る病』をつうじて、キリスト者となるために、絶望をしつくして最終的には「キリスト教を積極的に廃棄し、それを虚偽であると説く罪」(SKS 11, 236: 桦田訳 p. 230) というもつとも度の深められた絶望にまでいたることを、人びとに要求しているのである。

### 2-2-2-2 「理念性の諸要求」に応じるとき何が生じるか

では、『死に至る病』の「理念性の諸要求」に応じて同書の描出する絶望のすべてをしつくしたとき、いかなる事態が待ち受けているのか。

キエルケゴールは『死に至る病』第1編 A, C の中で、つぎのようなことを述べている。

もし人間が病気によって死ぬように絶望によって死ぬのであれば、彼の内なる永遠なもの det Evige i ham、自己 Selvet は、肉体がその病気で死ぬのと同じような意味で死ぬことができねばならないだろう。しかしこれは不可能である。絶望の死は、絶えず生へと転化するのである。絶望者は死ぬことができない。…絶望は絶望の基底に存する永遠なもの、自己を食い尽くすことはできないのである。(SKS 11, 134: 桧田訳 p. 37)

すなわち、『死に至る病』の「理念性の諸要求」に応じてどれだけ絶望を深めて永遠なもの・自己・神を失くそうとしても、それらはけっして失われることがないのである。

では、「理念性の諸要求」に応じて絶望をしつくしても永遠なもの・自己・神が失われることはないというこの事態は、そうした絶望者にいかなる作用をもたらすことになるのであろうか。キエルケゴールはつぎのようなことを述べている。

ソクラテスは、肉体の病気が肉体を食い尽くしてしまうようには魂の病（罪）は魂を食い尽くさないということから、魂の不死性を証明し

た<sup>•15</sup>。それと同様に、ひとはまた、絶望が彼の自己 *hans Selv* を食い尽くすことができないということ、これがまさに絶望における矛盾の苦しみであるということから、人間のうちなる永遠なもの *det Evige* を証明することができる。(SKS 11, 136: 棚田訳 p. 41-42)

神が現に存在すること、そして「彼」、彼自身、彼の自己 *hans Selv* がこの神のまえに現に存在すること、このような無限性の獲得は絶望を通して以外にはけつして得られない。(SKS 11, 143: 棚田訳 p. 53)

すなわち、「理念性の諸要求」に応じて絶望をしつくしても永遠なもの・自己・神が失われることはないというこの事態は、その絶望者にとって、かえって永遠なもの・自己・神の実存的な存在証明として働くのである。そうであるからこそキエルケゴールは絶望を「しつくす」ことを要求するのである。というのは、絶望をしつくすことによってはじめてその実存的な存在証明は完遂されることになるからである。なお、グリュンは、『死に至る病』における上掲の箇所 (SKS 11, 159: 棚田訳 p.85) を念頭に、「いかなる意味で、真理に到達するためにあらゆる否定性〔絶望〕を通り抜けることが必要なのであろうか」と問うている (Grøn 1997, p. 50, [ ] 内は引用者による) が、本稿のこうした見解はその問い合わせへの答えとなりうるであろう。

ここに、上掲の本稿の問題についてのキエルケゴールの考えが姿を現したものと思われる。すなわち、本稿は、なぜ絶望それ自身が死に至る病からの治癒の最初の形式でありうるのかを問うた。これに対しキエルケゴールはつぎのように答えるであろう。すなわち、絶望をしつくすことによりかえって永遠なもの・自己・神の実存的な存在証明がその絶望者のうちになされることになるので、と。敷衍して言えば、絶望をしつくすことにより絶望者のうちに永遠なもの・自己・神の実存的な存在証明がなされるときに、その絶望者は、自らの絶望を「責め」として知り始めるとともに、絶望を脱しキリストによる救いに与ろうと決意するのである。

•15 プラトン『国家』X, 608c-610 参照。

## 結び

以上、本稿では、『死に至る病』においてキエルケゴールが提示する「絶望の弁証法」とは何を意味するか解明することを試みてきた。本稿の考察をまとめれば、「絶望の弁証法」とはつぎのような事態を意味する。まず、「絶望」とは、人間が永遠の浄福への回帰についての神による問い合わせに対し永遠なもの・自己・神を失くそうとするという仕方で否定的な回答を与えることであった。そして、「絶望の弁証法」とは、そうした絶望が「死に至る病」であると同時に「この病からの治癒の最初の形式」であることを意味するのであった。これらのうち、絶望が「死に至る病」であるとは、絶望が永遠の命にかかる生における病であり精神における病であるという事態を意味した。そして、絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であるとは、絶望それ自身がそうした「死に至る病」からキリストによる救いに与ったあり方でありみずから絶望の状態を「責め」として学ぶようになった状態への第一歩である、という事態を意味した。そして、そのように絶望が「この病からの治癒の最初の形式」であるのはなぜかと言えば、絶望をしつくすことによりかえって永遠なもの・自己・神の実存的な存在証明が絶望者のうちになされることになるからであった。

こうした本稿の解明からすれば、「絶望」のさまざまな形態をその強度の上昇にしたがって描出することを中心的内容とする『死に至る病』とは、人びとにそれら絶望の諸形態のうちに自らの姿を見出させることにより人びとに自らが絶望のうちにあることを気づかせるための書である（マランチュク 1967 p. 363 参照）とともに<sup>\*16</sup>、人びとに絶望をそのもつとも強い形態（すなわち「キリスト教を積極的に廃棄し、それを虚偽であると説く罪」（SKS

\*16 キエルケゴールは自分が絶望のうちにあることを知ることによる「驚き」を機縁として絶望から信仰への転回が可能となるというケースも存することを、すなわちこうしたマランチュクの考えにも正当性が存することを、示唆している（SKS 11, 162: 枝田訳 p. 91 参照）。これは、換言すれば、絶望が死に至る病からの治癒の最初の形式であるのはなぜかという問い合わせへの答えが、『死に至る病』のうちに二通り存在しているということである。

11, 236: 桧田訳 p. 230)) にいたるまで推し進めさせるための書であるとも考えられるべきであろう。

## 文献

キエルケゴールの著作からの引用は、「批評的新版全集」(*Søren Kierkegaards Skrifter*, bd. 1-55, København 1997-.) に拠り、略号 (SKS)、巻数、頁数の順に記した(『死に至る病』からの引用に際しては、桜田啓三郎訳の頁数も併記した)。キエルケゴールの著作の草稿および日誌からの引用は、「日誌・遺稿集」(第二版) (*Søren Kierkegaards Papirer*, bd. I-XVI, København 1968-1978.) に拠り、略号 (Pap.)、巻数、内容分類記号、記述番号の順に記した。いずれの場合も邦訳は引用者による。

大谷長 (1977a) 「キエルケゴールにおける『絶望』概念の二つの顔」、『キエルケゴール研究』第7号、pp. 28-37

大谷長 (1977b) 「キエルケゴールにおける自由と非自由」、創文社

ディーム・H (佐々木一義・大谷長訳) (1969) 「キエルケゴールの実存弁証法」、創言社

桜田啓三郎訳・注 (1996) 「死にいたる病」、ちくま文庫 (初出は 1963)

マランチュク・G (大谷長訳) (1984) 「キエルケゴールの弁証法と実存」、東方出版

マランチュク・G (藤木正三訳) (1976) 「キエルケゴール：その著作の構造」、ヨルダン社

メールポール・B (尾崎和彦他訳) (1980) 「絶望の形而上学—キエルケゴー  
ル『死に至る病』の問題」、東海大学出版会

Grøn, A. (1997), "The Relation Between Part One and Part Two of The Sickness unto Death", Cappelørn, N. J. and Deuser, H. ed., *Kierkegaard Studies, Yearbook 1997*, Walter de Gruyter, pp. 35-50.

Theunissen, M. (2005), *Kierkegaard's Concept of Despair*, Princeton University Press.

Walsh, S. (2005), *Living Christianly: Kierkegaard's Dialectic of Christian Existence*, The Pennsylvania State University Press.

(すずき ゆうすけ・筑波大学)